

# 四国遍路とサンティアゴ巡礼

聖カタリナ大学・同大学短期大学部学長

ホビノ・サンミゲル



ご紹介いただきました、サンミゲルです。今日は四国遍路とサンティアゴ順礼道について話したいと思います。私の故郷はスペインのビジャフランカ・デル・ビエルソという所なのですが、日本に来てからもう40年になりますので、日本での私の故郷は道後です。道後には教会がありますが、その教会に40年前にやつてきました。それまで、日本の事はあまり知らなかったので、初めて日本の文化に触れ、日本のすばらしい人々に出会う事ができました。その時からあつという間に40年経ちました。

今日は四国遍路とサンティアゴ巡礼というテーマですが、内田先生から依頼を受けた際に、できれば比較して下さいというお願いがありました。私自身比較という言葉はあまり好きではないこともあります、実質あまり比較する事ができませんでした。

それからもう一つ最初にお話ししておきたいのは、私は勿論四国遍路を廻ったことはあります。歩いて廻ったというよりも、リレーで走って廻ったのですが、その経験は今でも忘れる事ができません。サンティアゴの場合は、私の故郷に近い事もあってほとんど毎年行っております。しかし、まだ一度も歩いた事はありません。ほとんど車で行っています。ただ、故郷はサンティアゴの巡礼道沿いにありますので、部分的には何度も巡礼道を歩いた事はありますが、サンティアゴまで巡礼で歩いた事はありません。

では、本題に入りたいと思いますが、3つのテーマに分けて話していきたいと思います。まず第一に、四国遍路とサンティアゴの基礎知識について、次に遍路道とサンティアゴの道との比較について話したいと思います。それから最後に、これはすごく面白いテーマだと思いますが、巡礼の道の文化と芸術についてお話ししたいと思います。

## I. 四国遍路とサンティアゴの基礎知識

まず第一のテーマ、四国遍路とサンティアゴの基礎知識についてですが、まず巡礼の精神についてお話しした後、四国遍路とサンティアゴの基礎知識についてそれでお話していきたいと思います。

### 1. 巡礼の精神と目的

最初に巡礼の精神についてですが、「巡礼」とはある聖地への旅であるということです。「巡礼」は、巡礼しようと決心し、出発したその土地から始まります。聖地へ行ってみたいという欲求が自然に沸いてきて、実際にその地に向かう、それが巡礼です。

なぜ聖地に行きたいのかという理由については、四国遍路のように、その聖地に偉大な宗教者が滞在した、またはその道を歩いたから、私たちも同じように歩きたいのです。またサンティアゴ巡礼の場合には、サンティアゴには聖ヤコブの墓があり、聖なる場所であるので、一回行ってみたいというものなどがあります。

巡礼の目的ですけれども、今はこんな時代ですから、理由はどうでもいい、とにかく一回行ってみたいということもあると思いますが、「巡礼」は宗教的な旅であるということを忘れてはいけないと私は思います。つまり、信仰の旅であるということですね。信仰はひとつの目的です。もう一つは、例えば偉大な学者・聖人である弘法大師という方にお会いして、弘法大師と同じように真理を探したい・悟りたいこともあります。それから、病の治癒などを祈願し、もし治癒すれば感謝するために巡礼を行

います。サンティアゴ巡礼ではよくあります。スペインでは、このような誓約による巡礼が非常に多く見られます。また、罪の償いということもあります。キリスト教では、罪を犯したら神に許しを願います。そして許される償いとして巡礼を行うということが、中世期のサンティアゴ巡礼にはよくありました。また、先ほども言いましたが、祈願が叶った・恵みをいただいたら、その感謝の気持ちとして四国遍路の場合であれば、弘法大師が巡った場所を同じように辿るということです。それから自己発見というものもあります。また、神秘的な体験を味わいたいという目的もあります。この頃日本ではサンティアゴ巡礼道についての文献がたくさん出ています。『スペイン巡礼の道を行く—世界遺産カミノ・デ・サンティアゴ』（東京書籍）や『スペイン巡礼の旅—パリからサンティアゴ・デ・コンポステーラへ』（気球の本）など。これらの本の著者の方々は、キリスト教信者ではありません。しかし巡礼を行い、その経験・体験を本に記されています。大変すばらしいと思います。

四国遍路とサンティアゴの道の共通点はいくつかあります。例えば、両方とも宗教的な神秘性を抱いているということ、もう一つは文化の道としてすばらしい芸術と自然環境を持っているということです。私は両方知っていますが、本当にどちらもすばらしいものであると思っています。

## 2. 四国遍路の基礎知識

四国遍路について皆さんはよくご存知だと思いますので、私から詳しくお話しする必要はないとは思いますが、一応簡単にご紹介したいと思います。四国遍路とは、四国にある八十八ヶ所のお寺を参拝することです。そして最後に高野山を訪れる。私も高野山に何回も行っております。四国遍路の巡礼が終わってから高野山に行きました。それから那智に有名なお寺がありますが、そこにも行きました。

また、巡礼者を「お遍路さん」といい、その先駆者は弘法大師です。私は彼を偉大な神秘主義者であり、偉大な学者であり、キリスト教の表現を使えば「偉大な聖人」であると考えております。弘法大師はすでにあったお寺を選び、また新たに建てたお寺を決め、巡礼の旅を開きました。最初はエリートの修行僧だけ巡礼をしていたようでしたが、その後江戸時代になって庶民に広まり、今のような形になったそうです。弘法大師は835年に高野山で入定したのです。

四国遍路道の距離は大体1200～1400kmです。私たちは4回に分けて走っておりましたので、1300km近くの旅だったのではないかと思います。私は毎日30kmくらい走ったと思います。四国遍路は、地図（図1）を見ると分かるように、時計回りです。鳴門市にある「靈山寺」からスタートし、左からずっと廻ってまた鳴門方面に戻ります。なぜ鳴門からはじめるかという理由は私も色々な文献を読んでおりまして、英語やスペイン語で書かれているある文献によると、

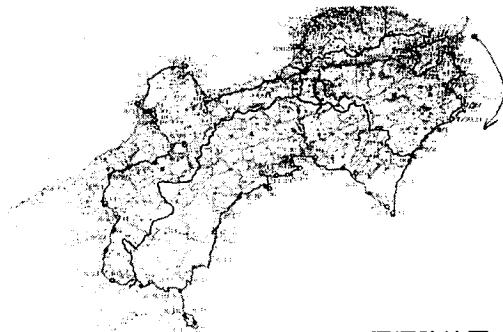


図1 四国遍路地図

巡礼者が高野山から來るので、明石海峡を渡って鳴門に着き遍路をはじめると書いてありました。今は明石海峡大橋があり、私も今は神戸に住んでおりますので車で何回も通っておりますが、遍路はその橋を渡って遍路道を廻ります。歩く速度は人によって異なりますが、大体50～60日くらいかかります。私たちのように50代でも、走って廻りましたのでそんなに日数はかからなかったと思います。

## 3. サンティアゴ道の基礎知識

サンティアゴの道とはサンティアゴ・デ・コンポステーラ市（Santiago de Compostela）への巡礼です。サンティアゴの巡礼はエルサレム、ローマのバチカンと並ぶキリスト教の三大聖地の一つです。12世紀にはサンティアゴが第一の聖地でした。なぜなら、イスラム教の台頭により信者たちがエルサレムに行けなかったからです。そのため、キリスト教徒らが聖地を取り戻そうと十字軍を編成するなどと

いたこともありました。それから、9世紀にイエスの弟子聖ペトロの墓がバチカンにあるとまだはっきりしていなかったため、サンティアゴがキリスト教の第一の聖地になりました。

サンティアゴ（聖ヤコブ）という人物はイエスの弟子であると聖書に記されています。サンティアゴはその兄弟ヨハネとペトロとともにイエスに最も大事にされた3人の弟子の一人でした。両親の名はセベデオとサロメとして知られています。伝説では、聖ヤコブはイエスが殺された後、スペインまで布教に来て、もう一度エルサレムに帰ったとされています。44年、エルサレムでヘロデ・アグリッパに殺害されたのです。そして聖ヤコブの弟子たちはその遺骨をスペインまで運び、ガリシア地方、今のサンティアゴの地に埋めたのです。

コンポステーラとは。コンポスはキャンパス（ラテン語でCampus）、「野原」という意味です。ステーラはステレ（Stellae）、「星」の意味です。なぜかというとサンティアゴの墓が発見された場所が非常に輝いていたからです。不思議に思って掘ってみると、聖ヤコブと2人の弟子の遺骨を発見したのです。これが9世紀のことでした。大体6世紀頃から聖ヤコブの墓がスペインにあるという話があり、文書も残っていましたが、ご存知の通り2000年前にはまだキリスト教がスペインに浸透しておらず、そこには様々な民族がいて、戦いもありました。ローマ人がスペインを侵略し、それに対してスペイン人は世界ではじめてゲリラを作つて対抗していました。また8世紀にはイスラム人がスペインに侵入し、イスラム教になっていくのですが、その複雑な状況の中でサンティアゴの墓を隠したりして場所が分からなくなってしまったのです。そして813年によく発見され、この発見のニュースはヨーロッパ中に広まり、王を始めとして多くの人が訪れるようになり、巡礼が始まったのです。遍路とほとんど同じ時期、9世紀に始まっています。

サンティアゴ巡礼が最も盛んであったのは12世紀ですが、1075年に現在の大聖堂の建設が始まり、1211年から140年ほどかけて完成されたのです（図2）。そして12世紀にはサンティアゴ・デ・コンポステーラはヨーロッパの中心的な巡礼地になっていくのです。

巡礼道の地図（図3）を載せてありますが、この真ん中のルート（リモージュの道）は現在世界遺産になっております。これはヴェズレー（Vezelay）から始まってピレネー山脈を越え、ロンセスバージェスという所で他の道と統合されます。トゥールと呼ばれる道はパリからつながっています。そのためイギリス人もここから合流します。しかし、イギリス人は船での巡礼も行つきました。ヴェズレーからのルートが中心となつたのは、ドイツ人やイタリア人などの北ヨーロッパの人々がこのルートをよく利用しているからです。また、ル・ピュイ（ル・ピュイの道）やアルル（トゥールーズの道）からなど、フランスからは4つのルートがあります。サンティアゴはスペインの北西の端にあり、ロンセスバージェスからはほぼ一本の道です。

サンティアゴの大聖堂は海から23kmほど離れておりますが、巡礼者たちは海まで行きます。そこにはフィニステーレ（世界の果て）というところがあります。ヨーロッパ人たちは死ぬ前にサンティアゴに来て世界の果てが見たいと願います。なぜなら巡礼が始まった当時、地球は平らなものであると考えられていたため、人々は地球がそこで終わると考えていたからです。コロンブスはスペインの南からアメリカへ出へ発しましたが、その時の人々は、コロンブスがもう戻らない、帰る



図2 サンティアゴの大聖堂

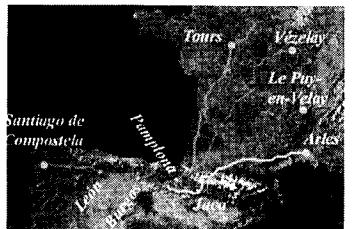


図3 サンティアゴへのフランスから巡礼道

事ができない、なぜならば地球は平らなものなので「地の果て」を超える地獄のような所に墮ちるだろうと考えていました。しかしコロンブスは自信を持っていました。コロンブスが率いていった3隻の船のうち、1隻はフィニステーレのすぐ近くのバヨーナの町に戻りました。去年の夏にもう一度見にいったのですが、今もそのラ・ピンタという船のレプリカが残されています。

## II. 遍路道とサンティアゴ道との比較

次に遍路と少し比較をしたいと思いますが、まずは宗教的な比較からいきたいと思います。それから2番目には、道の安全と道しるべ、3番目には巡礼の証明書、4番目には巡礼者の宿、5番目にはアルベルゲ（レフヒオ）という順番でお話していきたいと思います。

### 1. 宗教的比較

#### ①神聖な空間

前にも話しましたけども、巡礼は何といつても宗教的な行事であり、観光という目的で廻る方も勿論良いとは思いますが、これは「巡礼」とは少し違うと思います。四国遍路の場合は、弘法大師が歩いた道と一緒に歩くということですね、よく言われておりますが、「同行二人」ということです。弘法大師は金剛杖を持っていますが、巡礼者も杖を持って歩きます。精神的に神秘的な体験をすることも目的ですが、悟りを得るために精神的な修行をするということが主なポイントであると思います。

サンティアゴの場合には、遍路のような「同行二人」ということはないのですが、精神的神秘的体験や悟りを得るということは同じだと思います。巡礼路は神聖な空間として存在しています。そのため、人々は巡礼の際は普通の道とは違うという意識を持って巡礼路を歩いていると思います。私も四国遍路を参拝した時に、この道はちょっと違うなと感じていました。なぜかというと、偉大な聖人もその道を歩いた、だから私も歩くということですね。サンティアゴの場合には、もう子供の頃からずっと巡礼者を見ておりますが、700、800年間ずっと同じ道を巡礼者が歩いていたのだと思うと少し感動を覚えます。今は車や飛行機で行く人もおり、私も飛行機で一度マドリードから行ったことがあります。ともかくそれは神への信仰の旅であるに違いありません。ヨーロッパ人はキリスト教を信仰しておりますが、サンティアゴ（聖ヤコブ）自身は神ではないですね。サンティアゴはイエスの弟子であって、今天国にいると私たちは思っておりますので、その弟子の取りなしによって神様に願うという形ですね。そのためにサンティアゴに行くのです。それから聖人の遺骨に対して尊敬と畏敬を表すという目的もあります。それからフランス・ドイツ・イタリア・イギリスから多くの方々が来ますので、巡礼の活発化に伴って道沿いにキリスト教的な聖地がたくさん誕生しました。ですからそれらを訪ねながら、道を歩いていくということですね。真理を探す、自分を考える時間であることもあります。とにかく巡礼の道は神聖な空間だと思っております。

巡礼の目的の1つは聖地を詣でるということですから、四国遍路の道は仏教の聖地を参拝するためです。それを意識しておかなければなりません。松山にも石手寺や太山寺や円明寺などがあり、私はその前を通る時、ああここが遍路の道で、今まで何世紀に渡って偉大な方々の巡礼を思い出します。そして時々遍路の姿を見て、すごく感動しています。それから参拝するお寺は八十八ヶ所ですが、私たちが廻った時は八十九でした。八十八ヶ所の他に番外の寺が二十ほどあり、それらと一緒に廻ることもあります。

サンティアゴの道はキリスト教の聖地への道であり、目的はサンティアゴ・デ・コンポステーラ1つです。その点で遍路とは少し違いがあります。なぜかといいますと、先ほど四国の地図を見た時に、鳴門から始まって時計回りでずっと左へ左へと行き、一周して戻ります。つまりそのまま家に帰れます。しかしサンティアゴの道はちょっと違います。家から出発してサンティアゴが到着地ですが、歩いた道をもう一度通って家まで帰らなければいけない。直線の道ですので、廻らないんですね。それですから、時間

は倍かかることがあります。

## ②祈りの刷新

もう1つの宗教的な比較として祈りが挙げられます。巡礼をする方は祈りを中心にされているのではないかと思います。四国遍路は靈場ごとに決まった祈り、お経があります。私もお寺で泊まりましたが、大体5時頃にお勤めという祈りの時間がありまして、参加しました。本当に感動的でした。二度お坊さんに、あなたはカトリックの神父ではないですか、どうしてみんなと一緒に座っているのですか、私と一緒に座って下さいと言われ、護摩を焚くお坊さんの側で一緒に祈るという体験をしたことを今でも忘れることができません。

しかしサンティアゴと比較すると、初心者や若者にとってお経がわかりにくいという難点があります。外国人だけかもしれませんのが、お経の内容はちょっとわかりにくいと思いますね。キリスト教（カトリック）も少し前まで典礼の祈りはラテン語ばかりでしたから、ミサなどは誰も分かりませんでした。まあ説教とか歌とかは母国語でしたので何とか分かりました。そこでカトリックは第二バチカン公会議（1963年）で、思い切って各国に任せて、みんな自分たちの言葉で祈るようにと決めました。遍路にもこういうことが必要なのだと思います。宗派などがありますから、難しい部分もあるとは思いますが、若い人や初心者や、私の場合のように国際化を考えたら、内容を簡単に伝えるという形をとることも大事だと思います。例えばサンティアゴに行く人たちは国籍によって言葉が違います。英語、ドイツ語、オランダ語、場合によってはロシア語とか、それからイタリア語、フランス語、もうみんな違いますから、それぞれの国の言葉で祈りがあります。それからサンティアゴに、私がある日本人の神父と一緒に行った時に、巡礼者のミサに参加したことがありました。その時も巡礼者を考慮して一部を日本語で読むなどしました。そのミサには日本人が何人か参加しておりましたので、すごく喜んでいたそうです。この点だけ、遍路の祈りももう少し国際的にしてほしいと思います。まあサンティアゴに行く巡礼者たちはほとんどキリスト教ですから、祈りも共通点が多いということあります。

これは私が「霊山寺」から遍路に出発した時の写真（図4）です。私の頭から何か出ているのがわかりますか？これは一緒に行った人たちが、私はキリスト教の神父ですので、せっかくですから出発の祈りをして下さいと言われて、キリスト教の祈りをしたんですが、後でその時に撮った写真を現像してみたら後光が出していました。まあおそらく何かのせいで、後光のような現象が出たのではないかと思いますが。ともかく、愛光の二期生と一緒に五十代になった時に廻った、最初のお寺がここでした。

次の写真（図5）はある寺で泊まったときのものです。私は日本に来て40年経ちましたけれども、正座だけはできないのでほとんどひざまずいて祈っていました。朝や夜のお勤めにも参加しました。お寺では大体お勤めは午後5時か6時くらいだったと思います。

サンティアゴの巡礼ですが、一番の目的はサンティアゴ市です（図6）。



図4 遍路に出発したときの写真

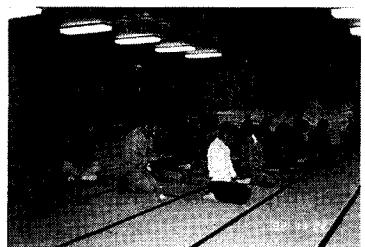


図5 お寺で泊まったときの朝の祈り



図6 サンティアゴ市に到着した巡礼者

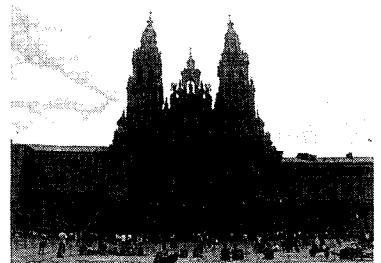


図7 カテドラルの前の広場



図8 聖ヤコブの像を後ろから抱く

サンティアゴに到着した巡礼者たちはカテドラル（大聖堂）の前の広場で休んだりします（図7）。そして大聖堂に入って祭壇のところへ行ってサンティアゴ（聖ヤコブ）像を後ろから抱いたりします（図8）。その後に地下のチャペルにあるサンティアゴの遺骨を参拝します（図9）。そしてミサに参加します（図10）。そして証明書をもらいに行きます（図11）。証明書をもらうためには、最低徒步で100km歩く必要があります。私の実家から歩けばもうことができます。自転車の場合は200km必要になります。それから車はもらえない。だから私はもらったことがありません。飛行機でももらえない。巡礼の証明書ですので、きちんと巡礼をした人しかもらえない。

来年はサンティアゴの聖年にあたります。聖年はサンティアゴの祝日である7月25日が日曜日にあたる年のことですが、この時になりますとサンティアゴ像を抱くのに3～4時間くらい並んで待たなければなりません。私が行く時はもう何回もしておりますので、優先的に中に通してもらえるのですが、まあすごい行列になります。大聖堂は非常に大きいです。

1万人くらいの人が立ったまま入る事ができます。私はある聖年の年の9月の日曜日、家族みんなでサンティアゴや海岸に遊びに行きましょうと言ってでかけました。父も90歳近くでしたので、頭が痛いからと一度は断られたのですが、一人で残していくわけにはいかないのでむりやり引っ張って連れて行ったんです。カテドラルの前には大きな広場がありまして、すごい人が並んでいました。ともかく父親はミサに行きたいというのですが、あまりの人の多さにあきらめようと言うと、巡礼のために来たじゃないですか。あなたは私をだましたのかというものですから、ともかくずっと並んでミサに参加することにしたんですね。そこで、初めてそんなにも多くの人がミサに参加しているのを見たものですから、非常に感動的でした。ミサで配る御聖体（パン）も神父が通ることができないほど中が込み合っていたので、人から人へ手渡していました。そしてミサが終わると、頭が痛いと言っていた父の調子もすごく良くなっていて、びっくりしました。聖年についてはそんなエピソードもありました。

また、大聖堂では大きな香が焚かれています（図12）。今はシャワーなどがありますが、昔は何日も体を洗わず歩き続ける巡礼者が多く、すごい体の臭いあったでしょう。その臭いを消すために香を使いました。カテドラルは十字架の形をしていますので、天井から大きな香炉を垂らしてブンブンと揺らしており、今でも大きなイベントの1つとして続けられています（図13）。

大聖堂で一番有名なのが「栄光の門」です（図14, 15）。柱などにイエスの弟子たちの彫像が彫られています。イエスの御像や有名な聖人たちの彫像もあります。これらは、建築物としても彫像としても最高の芸術として認められています。

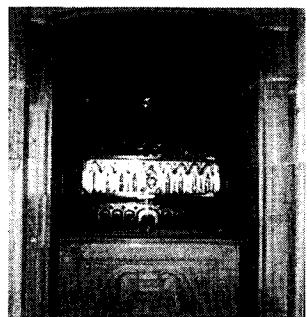


図9 サンティアゴの遺骨の棺

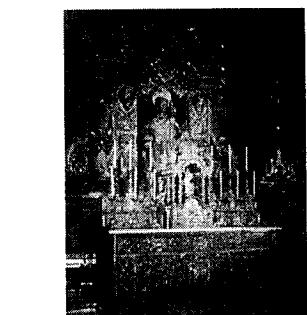


図10 巡礼者のミサとメイン祭壇



図11 証明書をもらいに行く巡礼者

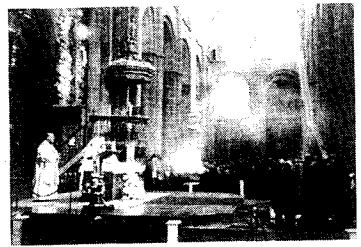
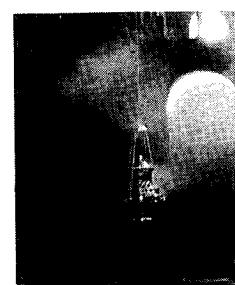


図12、13 サンティアゴ大聖堂の  
提げ香炉

## 2. 道の安全・道しるべ

やはり巡礼ですから、道の安全・道しるべが重要になります。四国遍路の場合には、一般的ボランティアや公共事業で道の整備が行われていると思います。サンティアゴの場合も同じことです。道の安全は巡礼者にとってとても大切なことです。たくさん的人が巡礼路を使用しますので、道沿いにある町・村だけでなく、県や市も協力して安全な道を作らなければなりません。サンティアゴの道は人々の協力により成り立っています。

そして巡礼の道の案内は市内も含めて大切です。私は松山市内の道しるべが分かりにくいという印象を受けました。サンティアゴの場合、町・市に入ってから出るまでの間に道しるべがしっかりとあり、迷うことはありません。もう1つは、車道と歩道を区別するということも大切です。今はアスファルトの舗装道がありますが、これは車を対象にした道です。日本では土地の問題がありますが、サンティアゴの場合には車が走るアスファルトの舗装道と、巡礼者が歩くための道が別になっています。もちろんアスファルトの道を歩くこともできますが、ほとんどの人はアスファルトでない道を選んで歩いています。

写真は舗道にある道しるべです(図16)。ですから道からはずれて市に入ってしまっても、もう一度巡礼の道に戻ることができます。サンティアゴ巡礼の案内はヨーロッパで共通しており、貝がらの形をしています(図16、17)。巡礼者たちはサンティアゴに参拝した後、海(フィニステーレ)へ行きます。その時貝を拾い、次の巡礼者のための道しるべとして貝を道に置いたりしていました。

サンティアゴの道しるべは非常にわかりやすく、巡礼者にとってとても助かります。やはり道案内というのはみんなが協力して整備し、わかりやすくすべきです。私も松山を歩きますが、まあ新しい道しるべもできているそうですが、あまり見当たりません。サンティアゴの場合は道しるべが共通しているので一目でわかりやすく、また案内が非常に細かいため、迷う心配がありません。巡礼者は安心して巡礼を行うことができます。

道の安全ですが、私の生まれた村は小さい村で、ポンフェラーダ市まで約10km、ビジャフランカ市まで9kmあります。その間を巡礼者たちが通っていくのですが、中世期には巡礼者にいろんな問題が起こりました。いうのもヨーロッパから来ている巡礼者は、大体1600kmありますので、うまくいけば2ヶ月ほどで巡礼できます。ところがまた戻らなくてはいけません。ですから4~6ヶ月ほどかかります。そのためにはお金が必要ですが、盗人も現れます。その盗人から巡礼者を守るために様々な団体が誕生しました。例えばテンプル騎士団がその役割を果たしていました。エルサレムの巡礼者の安全を守るために誕生したテンプル騎士団ですが、サンティアゴの巡礼者の安全を守る役目も担っていました(図18)。

## 3. 巡礼の証明書

次に証明書についてですが、私はサンティアゴではもらっていないのですが、四国遍路では納経してもらいました。納経帳は、お経を納めた印

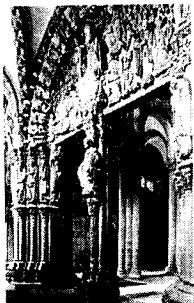


図14, 15 大聖堂の栄光の門

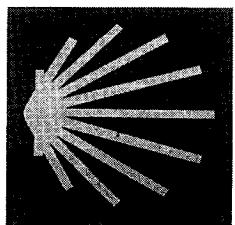


図16 道しるべ、レオン市の舗道にある道しるべ



図17 サンティアゴ巡礼の案内

としてもらう証明書であり、有料です。納経帳に印を書いてもらうのにもお金がかかります。

サンティアゴの場合は、アルベルゲ（後でアルベルゲがどういうものであるかについて説明いたします）や教会、観光案内所などで手帳（通行証明書Credencial）が発行されます。パスポートのようにスタンプを押していく形式で、スタンプをもらうと観光施設などに安く入場できるなどの特典があります。ですからフランスから来る人は約1600kmの距離を、スタンプを押しながらサンティアゴまで歩きます。ただし、これらの手帳・スタンプの押印は無料です。そして手帳を見せると、アルベルゲに無料で宿泊することができます。なぜ無料であるかというと、キリスト教では人を助けるということはやはり大切なことだからです。イエスによれば、人は死ぬとその行いの裁きを受けるといいます。そして生前に困った人を助けたかどうかがその評価の基準となるのです。ですから中世キリスト教社会では、みんながそれを意識していましたので、巡礼をしている人々を助けるために宿泊所が無料で提供されることになりました。証明書は、アルベルゲに無料で宿泊するために必要であると共に、サンティアゴに着いてからは、どのくらいの距離を旅してきたのかということの証明になります。その距離が充分であれば、巡礼証明書をもらうことができます（図19）。

図18 ポンフェラーダ市のテンブル騎士団の城（12世紀）

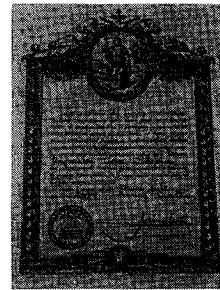


図19 サンティアゴ巡礼の証明書

#### 4. 巡礼者の宿

宿についてですが、遍路の場合はお寺の宿坊に泊まったり、民宿やホテル等に泊まります。お寺の宿坊の場合は無料のところもあるそうですが、有料のところが多いようです。ガイドブックなどを見れば、それらの情報が載っています。善根宿は、お坊さんが巡礼者を接待し、宿と場合によっては食事を提供するというもので、アルベルゲに非常に似ていると思います。

サンティアゴの場合にはアルベルゲという宿があり、この宿は巡礼者であればほとんど無料で泊まる事ができます。ほとんどというのは有料のアルベルゲもあるからですが、有料であってもさほど高くはありません。一泊5ユーロ、700円程度です。またホテルより安く泊まれるのがオスタル（HSR）です。うまくいけば1000円程度で宿泊できると思います。ホテルもありますが、パラドール、特に国営のパラドールはスペインで最も高い宿泊施設になります。一番高いパラドールはレオン市にあるサンマルコスと言われています。そこは昔、巡礼者のための病院でした。それからサンティアゴにあるパラドールも高いです。こちらも昔は巡礼者のための病院でした。ホテルの場合は1つ星から5つ星まであり、星の数によって値段が異なります。ペンションもあります。ペンションは、一般の家庭が空いたベッドを貸したり、一緒に食事したりするもので、有料になります。ただし、さほど高くはありません。

スペインのアルベルゲはレフヒオといい、スペイン語で避難所の意味です。ロンセスバージェスのアルベルゲは、12世紀に病院として建てられた古い古い建物です（図20）。アルベルゲは巡礼者専用の宿泊施設であり、先ほどもお話ししましたが、キリスト教の隣人愛（慈悲）の教えに基づいて誕生した宿です。巡礼者は非常に遠くからやってきてるので、困っている人を助けなければいけないということで始まりました。アルベルゲは非常に多く、道沿いにある市町村全てにあります。市町村などの公的機関や教会、信者個人、民営、ボランティアなどによって運営されています。大体午後3時から10時まで宿泊の受付をし、以降は閉めます。そ

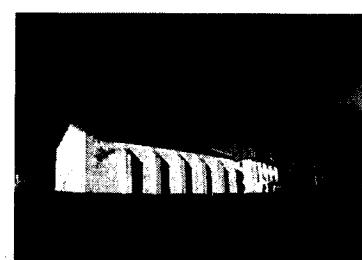


図20 ロンセスバージェスのアルベルゲ  
(12世紀の巡礼者の病院)

して翌朝8時頃みんなは出発します。旅の最初のアルベルゲで巡礼手帳をもらい、サンティアゴまでの道中にスタンプを押してもらい、巡礼の証明にします。アルベルゲは空き室さえあれば入ることができます。私の町ポンフェラーダ市のアルベルゲは210人ほど収容できます。ポンフェラーダの宿泊費は無料ですが、巡礼者たちはアルベルゲに対して寄付をします。有料のアルベルゲも少しありますが、先に話した通り高くても5ユーロです。朝食や夕食をつけるとさらに5ユーロかかりますので、10ユーロ、1200円くらいで宿泊することができます。サンティアゴの道のウォーキングガイドには、アルベルゲの設備などが詳しく書かれています。例えばベッドはどうなっているのか、二段ベッドかそうでないかとか、キッチンがあるかどうかとか。ほとんどのアルベルゲは二段ベッドです。日本でしたら畳ですのでざこ寝ができますが、ヨーロッパはベッドです。キッチンですが、無料ですので食事がついていなければ、マーケットなどで材料を買って自分で作ることができます。シャワーもお湯が出るのか出ないので、詳しく書かれています。それから洗濯機、乾燥機、自転車置き場の有無などが全て詳しく書かれています。ですから巡礼者はガイドを見ながら宿泊するアルベルゲを選ぶことができますが、早く到着しないと満室になってしまう場合もあります。

パンプローナ市では古い教会を改造してアルベルゲにしています。パンプローナ市はナバラ州都ですが、このアルベルゲはボランティア団体が世話をしています。二段ベッドやシャワーやキッチン、食堂、洗濯機、乾燥機があり、無料で宿泊できます。寝具なども全て備え付けられています(図21)。特にサンティアゴ巡礼は若い人が多いので、よくアルベルゲを利用します。

### III. 巡礼の道の文化・芸術

次に巡礼の道の文化・芸術について述べていきたいと思います。ここでは4つの点に分けてお話ししたいと思います。まず文化の交流、それからスピリチュアルケアの施設、体のケア（病院）、道のインフラ（インフラストラクチャinfrastructure：経済成長のための基盤、経済の発展を促すための公共施設）と経済についてです。

#### 1. 文化的交流

まず文化ですが、やはり巡礼の道は史跡になります。四国もサンティアゴも800年ずっと巡礼者が通り続けた道であり、またその道中にはすばらしいお寺や教会などが建てられています。みなさんは毎日見ておりますので、まあ私のサンティアゴの場合も同じ事ですが、あまりそれほど感じないかもしれません。しかし、よそからや外国から来ると全然印象が違います。みんなとてもすごいと感じます。



講演会の会場風景

ですからこの四国の文化をもっと国際的にも開放しなければならないと思います。

サンティアゴの道はヨーロッパの文化交流の場所になっています。いろんな民族がそこで出会うのです。巡礼者同士のコミュニケーションによって、それぞれの文明や慣習や思想などを交換します。ですから今まで考えもしなかったことを聞き、視野が広がり、心が豊かになります。EUは、サンティアゴ道がヨーロッパ第一の交流の場であると宣言しています。今でも多くの巡礼者によって、そのような交流が続けられ

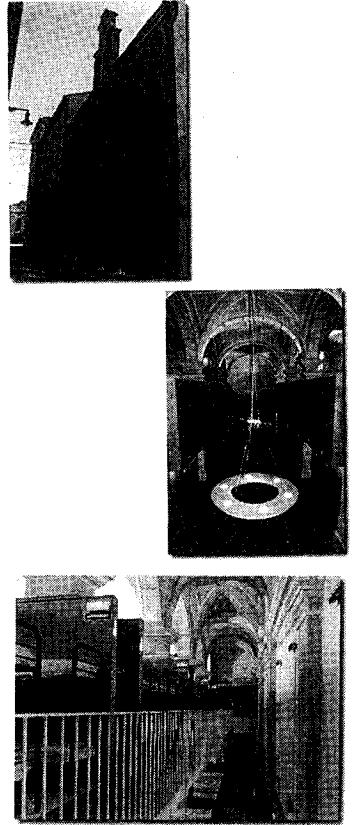


図21 パンプロナ市運営のアルベルゲ

ています。去年巡礼の証明書を受けた人は約20万人ですが、自転車や車などで巡礼道を通った人は何百万人といいます。それから偉い人などもよく訪れます。例えばサンティアゴ（聖ヤコブ）はスペインの保護者です。そのため毎年7月25日にはスペイン王がサンティアゴに参拝します。これは毎年行われます。場合によっては政治家も参拝します。もちろんサンティアゴ州の政治家も行きます。また学者、芸術家、文学者、詩人などもサンティアゴを訪れます。ですから中世から現在までいろんな新しい文化や伝説や文学などが生まれました。また、聖ヤコブに対してヨーロッパ中の人々が同じ賛美歌を歌います。ですから歴史の流れの中で、本当にすごい文化をつくってきました。一昨日の新聞で、来年が聖年に当たるので、マルティン・シーンという有名な映画監督は母親がサンティアゴの出身らしいのですが、来年までにサンティアゴ道の映画を製作するという記事が載っていました。サンティアゴの道はヨーロッパにとって新しい文明が発展する場所となっているのです。

711年にイスラム人は渡来し、その後に征服されたスペインを再びキリスト教国に戻そうとする運動（再征服・reconquista）がありました。この時、スペインには様々な伝説が生まれました。例えば、クラビホの戦いでは、白馬に乗ったサンティアゴ（聖ヤコブ）が現れてキリスト教勢を勝利に導いたと言われています。この噂がヨーロッパ中に広まり、巡礼者が増えました。イスラム人は800年の間スペインにいたのですが、このように徐々にスペインから追い出すことに成功しました。しかし、イスラム人がスペインにいた800年の間、宗教的には平和でした。なぜなら、イスラム人政治家はキリスト教やユダヤ教を禁止しなかったからです。宗教税を払えば宗教を自由にしました。ですからお金さえ払えばキリスト教やユダヤ教を信仰することが許されました。この800年間は宗教戦争もなく、本当に平和な、模範的な時代でした。

四国の遍路の中にもこの文化交流を見ることがきると思います。松山の「圓明寺」には17世紀日本人の隠れキリストンが作ったマリア観音が大切に保存されています（図22）。わたしは外国人が来るたびに、例えばこの間はローマから聖ドミニコ修道会の総長が、また2年前には東京にいるバチカン大使が松山を訪れた際に、ここに連れてきました。遍路道で見られるすばらしい文化の一つだと思います。

## 2. スピリチュアルケア：施設

次にスピリチュアルケアの施設についてですが、巡礼者たちは精神的に疲れ果て、祈るために様々なお寺や修道院、教会などを建てます。それは一つのスピリチュアルケア、心のケアのために今でもあります。写真はサンミジョン・デ・ラス・コゴジャスの修道院です（図23）。熱心に巡礼者を世話をしたサンミジョンは後に聖人となり、ここも聖地となりました。次にブルゴス市にあるカテドラル（大聖堂）（図24）は、サンティアゴ道とは別に世界遺産に登録されています。非常にすごいカテドラルです。また、私の所属するレオン市のカテドラルのステンド



図22 17世紀の隠れキリストンのマリア観音(圓明寺)



図23 サンミジョン・デ・ラス・コゴジャスの修道院

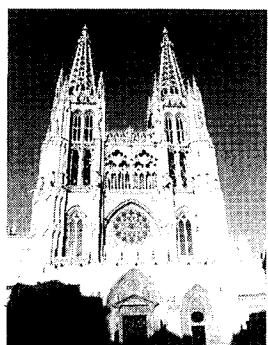


図24 ブルゴス市の大聖堂

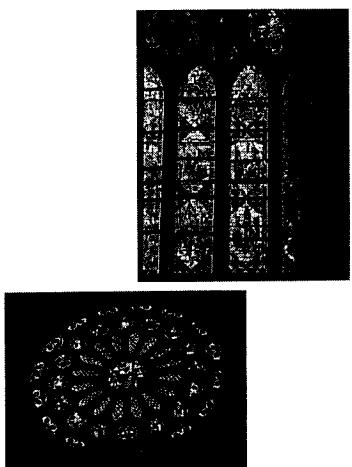
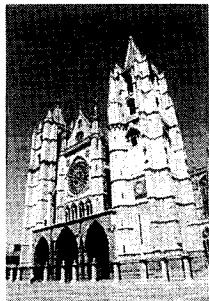


図25 レオン市の大聖堂とステンドグラス

グラスは、ノートルダムのものにも負けないくらいすばらしいです（図25）。どちらも同じ建築家によって建てられました。しかしレオンのカテドラルの中は全てステンドグラスなので本当にすごいです。ぜひ一度は訪れて見て下さい。

### 3. 体のケア：病院

次は病院についてですが、巡礼道沿いには巡礼者のためにたくさんの病院が造されました。治療は全て無料で行われました。大きな病院がたくさん造られました。写真はその一つ、ブルゴス市の病院です（図26）。このような大きな病院や橋の建設などは、もちろん個人の力ではどうしようもないのです、行政などがみんなで力を合わせ、王の権力のもとに造っていました。これは、このサンティアゴ道の一つの特徴だと思います。「巡礼の道」は「みんなの道」とあります。先ほど話しましたが、レオンには有名なサンマルコスという病院・修道院がありました（図27）。今はホテルとなっており、私もレオン大学と聖カタリナ大学を姉妹校にするためにレオンを訪れた際、ここに泊りました。スペインに行った時はぜひ泊まって下さい。本当にすごい建物です。私の県の誇りです。

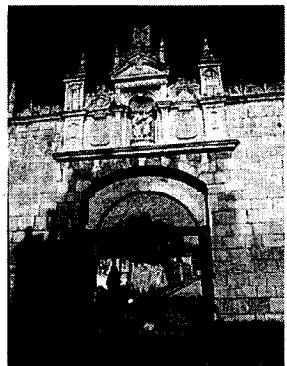


図26 ブルゴス市の病院

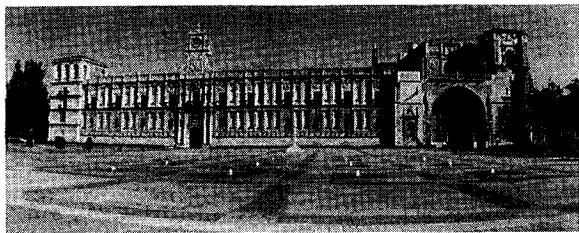


図27 レオン市のサンマルコスホテル



図28 モリナ・セカのローマ時代の橋

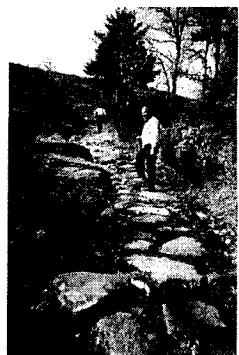


図29 巡礼者歩く  
ローマ時代の道

### 4. 道のインフラと経済

次に道のインフラですけども、サンティアゴ巡礼のためにたくさんの方々が整備され、また造られました。また、多くの巡礼者が行き交う巡礼道は経済・商売の格好の場であり、巡礼者を相手にした商売やお金を両替するための銀行などが生まれました。そのために村や町もできました。写真は私の故郷の近くにあるローマ時代の橋です（図28）。次の写真はポルトガルからローマまでにつながっていた道で（図29）、今でも使われています。またコンクリートの舗装道路もありますので、巡礼者は昔ながらの道を歩くか、舗装道路を使うか選ぶことができます。

あまりまとめられませんでしたが、四国遍路もサンティアゴもすばらしい道だと思います。ただ私は、四国遍路はもう少し国際的になって欲しい、それからやはりみんなが興味を持って、四国遍路が世界遺産に登録されるように協力していただきたいと思っています。せっかくすばらしい文化や歴史があるのだから、それを表に出し、四国遍路の文化的価値や自然の美しさを国際的に認めてもらえるよう努力をしていただきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。



図30 車の道と巡礼者の道